

今回が最後のドラギ総裁、最後の会見に注目～ECB理事会

2019年10月21日(月)

今月末で任期満了となるドラギECB総裁。
17日、18日のEU首脳会合でラガルド前IMF専務理事(元フランス財務相)の次期総裁就任が正式に決定し、
11月11日より新しい体制になります。

24日のECB理事会は、ドラギ総裁にとって最後の理事会となります。
前回の理事会で3年半ぶりの中銀預金金利の引き下げという形での利下げ、昨年12月で終了した量的緩和の再開、
フォワードガイダンスの見直しなど包括的な金融緩和の実施が決定。
今回は前回決定のすぐ後ということもあり、現状維持が見込まれています。

注目は声明とドラギ総裁にとって最後の会見となります。

前回の包括的金融緩和については、
10日に発表された議事要旨において、反対意見が多数出ていたことが明らかになっています。
量的緩和再開については6名のECB専務理事のうち2名が反対。
各国の中銀総裁含む理事会メンバーの1/3が利下げに慎重姿勢という状況となっていました。
その後もドイツやオーストリアの中銀総裁から現行の政策に反対姿勢が示されるなど、
意見の対立が鮮明となっています。

なお、比較的タカ派的な意見が強いドイツ、オーストリア、オランダなどだけでなく、
フランスも同国出身のクレー専務理事が量的緩和再開に反対するなど、緩和拡大には慎重姿勢を示していました。
しかし、同国のビルロッドガロー中銀総裁が18日、
意見の対立は過去のもの、ユーロ圏全域で緩和政策を支援していこうという姿勢を示すなど、
前向きな動きも見られます。

こうした状況を受けて、ドラギ総裁が自身最後の理事会を、またその任期中の金融政策を、
どのように振り返り、ラガルド次期総裁にバトンタッチするのが注目される所です。

同日にトルコ中銀も金融政策を発表します。
今年7月に就任したウイサル総裁の下で、同月に4.25%、9月に3.25%と、
連続で計7.5%の利下げを実施した同中銀。

エルドアン大統領はさらなる利下げを要求しており、利下げサイクルの継続が期待されています。

もっとも前回の理事会での声明では、一段の利下げ余地は小さいとして、
今後は少し慎重な対応をとることが示唆されました。

そのため直近二回ほどの大幅利下げ見通しは後退。

今回も利下げずるとの見通しが一般的ですが、市場の予想は1%の利下げ(現行の16.5%から15.5%へ)という見方が中央値に。
ある程度予想は分かれています、15%台が多いようです。

もっとも政策金利の引き下げがインフレの低下につながるの持論の元で、
トルコ中銀に対する圧力を強め、前総裁の解任につなげたエルドアン大統領は、
政策金利は近く下げたになると公言しています。

1%の利下げでは不満を強めてくる可能性があるだけに、
トルコ中銀がそうした状況にどこまで対応してくるのが注目されます。
15%を割り込むような大幅利下げはリラ売りの材料となる可能性があります、

その他材料としては21日に行われるカナダの総選挙があります。

トルドー首相率いる中道左派自由党がかなりの苦戦と事前報道されています。
トルドー人気もあって、前回選挙では単独過半数を確保するなど、
支持率の高かった同党ですが、経済成長の鈍化への不満に加え、
首相の地元贈賄事件に対する捜査への圧力疑惑がスキャンダルとなり支持率を落としています。

最大野党である保守党が直前世論調査で自由党をわずかながら上回ったこともあり、
激戦が予想される今回の選挙。どちらが勝つにせよ単独過半数確保はかなり難しいと見られ、
連立の行方と併せてカナダの政局は混乱する可能性。

政治的な混乱は通貨の売り材料となるだけに、結果をきちんと見極めたいところです。